平成28年度岡山大学大学院社会文化科学研究科博士前期課程【2月募集】入学試験問題

講　　座	経済理論・統計、比較経済、政策科学、 経営学、組織経済学、 地域公共政策コース
専門科目	マクロ経済学

以下の問１、問２の両方に解答しなさい。なお、問１は解答用紙の第１ページと第２ページに解答し、問２は解答用紙の第３ページと第４ページに解答しなさい。

問１　国民所得（Y）が消費（C）・投資（I）・政府支出（G）からなるマクロ経済モデルを考える。

（1）消費関数が所得の増加関数と仮定する場合の（比例税制が存在しないときの）投資乗数を導出せよ。ただし、限界消費性向を $c\ (0 < c < 1)$ とする。

（2）消費関数が可処分所得の増加関数、および租税（T）が所得の増加関数と仮定する場合の（比例税制が存在するときの）投資乗数を導出せよ。ただし、所得に対する限界税率を $t\ (0 < t < 1)$ とする。

（3）上述のモデル分析の結果を踏まえて、比例税制が存在しないときと存在するときとでは、どちらのほうが乗数効果が大きいかを説明せよ。

（4）いま、$c=0.8$、$t=0.1$ と仮定するならば、比例税制が存在するときの所得の変動は、比例税制が存在しないときの所得の変動に比べて、ビルトイン・スタビライザー（自動安定化装置）の働きにより約何％減殺されるか。（3）での結果を基にして、順を追って詳細に説明せよ。

（5）ビルトイン・スタビライザーの基本的なメカニズム（仕組み）について説明せよ。また、現実の制度の中でビルトイン・スタビライザー効果をもつ制度の例を二つ挙げ、それぞれについて、どのようなプロセスによりその効果を有するのかについて説明せよ。

問2　新古典派とケインジアンの二つの立場から金融政策の有効性について考える。いま経済が次のような体系で記述されるものとする。

$$\frac{W}{P} = 26 - 4L \qquad \text{（労働需要曲線）}$$

$$\frac{W}{P} = 2L - 4 \qquad \text{（労働供給曲線）}$$

$$Y = 50L \qquad \text{（生産関数）}$$

ここで、W は名目賃金、P は物価水準、L は労働量、Y は GDP（国内総生産）である。以下の設問に答えなさい。

(1)　新古典派の立場から、労働市場に非自発的失業が生じない理由を説明しなさい。そして、総供給曲線を求め、図を用いながらその特徴を説明しなさい。

(2)　ケインジアンの立場から、労働市場に非自発的失業が生じる理由を説明しなさい。そして、名目賃金が 30 より下がらない場合の総供給曲線を求め、図を用いながらその特徴を説明しなさい。

(3)　(1)と(2)の結果を踏まえて、新古典派とケインジアンの間での金融緩和政策（貨幣供給量の増加）の効果の違いについて、図を用いながら説明しなさい。また、この違いは両者の根本的な考え方の相違から生じていると考えられるが、それについて簡潔に述べなさい。

以上